２０１５年　５月　２１日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
理　事　長　喜　多　　悦　子　殿

所属機関・職名
訪問看護ステーション はーと　スタッフ

研 修 者 氏 名　　富岡　里江　印

２０１４年度日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成
研　修　報　告　書　の　提　出　に　つ　い　て

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

１．研 修 期 間　２０１５年 ４月３０日 ～ ５月 ３日（４日間）

２．参加学会名　Asia Pacific Hospice Palliative Care Network 2015 Taipei

３．研修報告書（注　研修報告書はＡ４判横書き）

Ⅰ　本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

Ⅱ　今後の課題等

Ⅲ　本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

２０１４年度日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成
研修報告書－APHCに参加して－

訪問看護ステーション はーと
富岡　里江

Ⅰ　本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

今回、日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成を受け、台北で行われた第11回アジア・太平洋ホスピス緩和ケアネットワーク（Asia Pacific Hospice Palliative Care Network 2015 Taipei）に参加する機会を得た。初めての海外学会参加で不安が大きかったが、考えていた以上に得るものがあった。

学会会場は、日本の学会と比べ展示は少なく、プログラムも多くないため、ゆったりした印象であった。午前午後のティータイムやランチタイムが長くとられており、時間的にもゆとりがあった。国内の学会では、いつも忙しくセミナーやシンポジウムを梯子しているため新鮮であった。アジアをはじめとする様々な国の方の参加があり、ベジタリアンのお弁当が準備されているなど、異文化に触れることができた。

色々な角度から緩和ケアについて報告があった。緩和ケアには切っても切り離せないそれぞれの文化の中で、試行錯誤しながら取り組んでいる様子などが伝わってきた。中でも看護師教育については、課題を持ちながら工夫して行っている様子の報告を聞き、思いは同じだと思った。

今回ポスター発表を通して、自分たちが行っている日々のケアを発信していくことの必要性を痛感し、日本の緩和ケアの取組をもっと伝えるべきではないかと感じた。

今回の助成の機会がなければ参加することのなかった学会であったと思うが、縁や運に恵まれ思いがけない経験が出来た。あの空間の空気を感じられたことは、自分の見聞を広げることに繋がった。緩和ケアは、どこまで行っても発展途上だと思う。常に広い視野を持ち、これからも研鑽を続けることの必要性を再確認できた4日間であった。

Ⅱ　今後の課題等

何といっても、語学力の不足については第一の課題である。せっかくのチャンスに十分理解できなかったことが心残りである。しかし、専門の通訳がいない環境は、聴きとらなくては…と自分を追い込むことも出来た。

また、初日に日本交流協会台北事務所の沼田氏にお話を聴く機会を頂いた。お話を聴きながら、拙い知識が繋がっていったが、台湾の歴史や文化を予習しておらず、質問も出来なかった。訪問先の歴史や地理などを調べておくことも文化の理解には、必要であると反省した。

Ⅲ　本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

フィールドが違ってもホスピス緩和ケアについて同じような思いを持っている仲間（諸先輩方）と日常を離れて交流することが出来ました。海外の学会参加という貴重な機会を与えて頂き、たくさんの刺激を受けることが出来ました。笹川記念保健協力財団の御支援に、心より感謝致します。